

語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう



秘密の場所の
ごちそう

実りの秋などという言葉は知らなくても、周囲の木の葉が色づいてくれば「そろそろあそこだな」と誰ともなく連れ立って様子を見る。どこにどんな実がなっているかは、年長者から代々伝えられたものです。特に人気のあったのはヤマブドウとコクワ（サルナシ）。食べ物の少なかった時代に、どちらもその甘酸っぱい味が子供たちをとりこにしました。ヤマブドウはたくさんとれば親も大喜びでジュースに。それが知らぬ間に？ ワインに変質などということもありましたよね。久しぶりにたずねたかつてのそうした秘密の場所が、宅地に一変していつがっかりしたということさえ、もう昔語り。せめて都心のイチヨウ並木で、ギンナン拾いに精を出すこととしましょうか。

ひと街ごと No.21

- ・時の街角／旧近藤医院——2
- ・マチの博物館／札幌化材——3
- ・あるばむレトロポリス／豊平橋——4
- ・川筋を行く／石狩川——5
- ・来た道／行く道／高野染工場——6
- ・道具で道草30年——7
- ・時計のある風景——8

二〇〇七年 秋(全四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1159

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階
(向)編集工房海内 TEL(011)633-1651



時の街角

北海道開拓の村から

世の中がいまほど進んでいない時代に
どんな田舎にあっても
科学や文化の最先端に触れることのできたのは
おそらく病院だったのではないのでしょうか
あまり良い思い出はないかもしれませんが――

漁師町に映えた 大正モダン

旧近藤医院 大正九年（一九二〇）建築

北海道の医療機関が整備されるの
は、明治二年（一八六九）に開拓使
が設置されてからです。官立に続け
て公立病院の設立が進められ、公立

で最初に建てられたのが古平、美国、
積丹三郡の拠金による古平村の公立
病院でした。

この近藤医院は、明治三十三年
（一九〇〇）に函館病院から古平病院
内科医長として招かれた近藤清吉が、
二年後に三十一歳で開業したもので
す。その若さがニシン漁で賑わう漁
師町で話題を呼び、また歓迎もされ
たことでしょう。

現存の建物は、大正八年（一九一九）
の大火で分院を焼失したときに、翌
年に建て直した新医院。清吉の死後
は三男が昭和三十三年（一九五八）
まで診療を行っていました。なによ
りも玄関ポーチの上のバルコニーが
しゃれており、外壁の西洋下見張り、
上げ下げ窓も大正モダンの典型です。

一階には薬局、診
察室、茶の間、手
術室。二階に書斎、
家族部屋、客間が
あります。

診察室をのぞい
てみると、昭和三十
年代まではどこ
の個人病院にもあ
った大きな人体図
が掛かっています。
現代の明るいクリ
ニックとはやはり
隔世の感。隣の手
術室にいたっては
何か痛々しい思い
にとらわれます。炬を切つてある畳敷
きの待合室で、患者たちはどんな気
持ちで順番を待っていたのでしょうか。

待合室といえば油絵の具で描かれ
たふすまの絵が、患者の気持ちをや
わらげてくれるかのよう。診察室に
ある絵も同様で、医師の趣味の良さ
が偲べれます。加えて驚かされるの
が、隣接の瓦葺の石倉に展示されて
いる一万冊もの蔵書。地方の医師と
いえば専門以外の何役もこなさなけ
ればならなかったはず。そのために
様々な分野の最新情報を学んでいた
ことがうかがえます。
ちなみにこの石倉は、明治四十一



診察室や待合室の絵に気持ちか和む(右上下)
隣接の石造の文倉には10,000点の蔵書が(中下)
医院の内外に見られる和洋折衷は
小樽に近いという土地柄もあるだろう

漁師町に出現した最新の建物は
玄関ポーチの上のバルコニーがユニーク
ガラスをうまく使った意匠は院長自らの設計



花の命は短くて、苦心のアレンジメントも数日の命でも造花だったらどうでしょう
生花と見まごうアーティフィシャルな花だったら——
これからの季節にさらに存在価値のある「花の群れ」を発見

すべてアートの 百花りよう乱。

ついこの間まで、ポリウム感のあるヒマワリの黄色やトロピカルフラワーの極彩色が目飛び込んできたのに、店頭はいつの間にか秋から冬の装い。クリスマスをエレガントに演出してくれる、黒を基調とした色合いの花々が迎えてくれます。
訪れるたびにこうした楽しみがあるのはアーティフィシャルフラワーだからこそ。四季を通して「無限のアイテムがありますよ」というのは常務の畑中義弘さん(三)です。

自然の美しさではもちろん生花にはかないませんが、手入れすれば飽きるまで持つのがアーティフィシャルフラワーの最大の特徴。東京の大手販売店の代理店も兼ねながら、常に定番の花と流行の最先端の花とを、季節と



冬には冬の色がある店内、この時季のメインは黒を基調としたクリスマスカラー

定番と流行の先端と。アレンジメントで提案も——。



ない花はいくら——
ぐるり一周しながら
アレンジメントのヒントを
定番といえども色は様々

行事に合わせて全道一の規模でそろえています。
お客さんは生花店や園芸店のプロから一般の人まで様々ですが、定番人気はバラ、カラー、そしてラン。たくさんのお花とともにディスプレイされたこちらの独自のアレンジメントも、お好みで選ぶときの参考になります。畑中常務によりますと、新しい提案や講習会の開催なども常時。需要者と一体となった店づくりに安心感があります。
アーティフィシャルフラワーより少し値段は張りますが、近年、人気の高まっているのがプリザーブドフラワーです。本物の花を一度脱色してから新たに着色

すること、自然の質感を五年から十年は保てること。バラ、コチヨウラン、ヒマワリ、チューリップと商品化され、今後の伸びも大いに期待されているところ。
こんな花まで造花なの？ というくらい色とりどりの花がある博物館。花器やリボン、ラッピング資材なども豊富にそろっていますから、クリスマスの飾りやリース、デキギフトなどに個性を發揮したい人は、ぜひ一度入館をおすすめします。



プリザーブドフラワーによる神保豊氏の作品から



橋のたもとからしてこの重厚な造り
欄干などの浮き彫り、シャンデリアの装飾は
現代でも十分に通用する意匠(昭和5年撮影)



あるばお
レトロポリス

豊平橋

札幌の母なる川、豊平川にはたくさんの橋がかかっていますが、市民に最もおなじみなのは豊平橋。百八十万都市からは想像できないような洪水との闘いを経て現在の姿があります。

名橋も車の洪水で退場余儀なく。

江戸時代末期、志村鉄一と吉田茂

八の二人が豊平橋付近の渡守に任命されて今年で百五十年とか。おそろくはすべての橋が丸木橋から出発したように、この渡船に替わってここに二連の丸木橋がかかるのが明治四年(一八七二)のことでした。しかしこれが架けては流され、破壊されという川との闘いの始まり。その数、明治四十二年までに三十回とも四十

回ともいわれているそうです。

その明治四十二年とは、市内の六百九戸が浸水するという大洪水の年。明治三十一年に完成した鉄橋では耐えられず、いよいよ永久橋が必要に。大正十三年(一九一四)に旧豊平橋が完成したのです。現在の橋になるのは昭和四十一年(一九六六)のことですから、名橋と賞賛された姿を記憶している人も多いでしょう。

一番の特徴はタイドアーチ型式のゆえんである両側の三つの鉄のアーチ。力強さと曲線美が一体となり、さらに「高欄や束柱には、花柄が浮き彫りされており、シャンデリア風の照明とともに見る人々にロマンと安らぎを与えてくれ」(さっぽろ文庫8)ました。しかし一方で、人口十万人余の都市にはぜいたくという

批判があつたのも事実。市電も馬車もいっしょに走っている写真を見ると、それも的外れではありません。残念ながらこの橋の役目が終わるのは、水ではなく車の洪水によるものでした。完成してから四十年もの間に、交通量が架設当時の想定を上回ってしまったのです。昭和三十九年から架け替え工事が始まり、二年後に完成しました。

二十一世紀に入つてその市電の姿はすでになく、四六時中膨大な量の車が疾走するばかり。橋の姿も味気なく感じられるのは、ひたすら機能を優先するからでしょうか。



3連の鉄のアーチが美しいタイドアーチ型
名橋と呼ばれたかのんびりした風景も
電車、車、馬車、人が一緒に(昭和28年撮影)

※写真提供/札幌市写真ライブラリー ※参考文献/さっぽろ文庫8 札幌の橋



道央の大動脈、国道36号といえは
180万都市を出入りする車の量も屈指
昔の姿は想像もつかない

石狩川

少年の夢、いまなお川魚漁に生きて40年

少年時代は水辺で魚を取ることに夢中だったのに、ほとんどの大人がその夢とは無縁です。それが生涯の仕事だったらどんなに楽しいか、しかも大都市のすぐ近くで——川魚漁に生きる人を訪ねました

まだ朝もやの残る

水面に、大学ボート部がアメンボ(艇)を漕ぎ出すところ、岡念さん(六九)は漁場へ車を走らせませす。この日の行き先はまず茨戸川下流の、石狩川とつながる水門近く。マリクラブの棧橋が並ぶ船着場から船外機付きの小舟に乗り込んで、カワガニのカゴとワカサギの定置網を揚げに向かいます。一帯はかつて岡さんの生家が あったところ。十八歳までは泳い



生まれ育った川で生涯の仕事——岡念さん

めながら次々とカニカゴを揚げていくと、大小のカワガニがウジャウジャ。「最近、人気が出てきているんでね」と岡さんも好漁にっこり。そして次はワカサギの定置網起こし。三人



たびに、水辺に密生するガマで曾祖母が草履を編んでくれたことや、アイヌの人もゴザなどを作っていたことを思い出すと、そのガマの茂みに沿って舟を進

川筋を行く

人と川の
様々な
かわわりを
たずねて

カワエビを
だり

取ったりして遊ん
だそうです。ここへ来る



大漁のウグイとカワガニ

が石狩川本流で、度重なる水害のため大正七年から十三年もの歳月を費やして開削した、当別町美登江と石狩市生振の間の直線水路が現在の石狩川です。岡さんの漁場はこの茨戸川全域と、石狩川の旧渡船場からJR札沼線の鉄橋付近まで。親子二代の川魚漁師で、四十年前に岡さんが水産加工も手がける会社組織にしました。しかしその当時で二十軒ほどあつた川魚漁家が、いまではわずかに三軒。「茨戸川の土手にはいたるところに柳の木が茂り、日陰

の漁師
さんが呼吸を合
わせてゆつくりと網
を手練り寄せ、掛け声と
共に舟の上へ。たちまち漂う
ワカサギのにおいに大漁はま
ちがいなし。でもそれよりおびた
しい数のウグイ。大きなウグイは
カワガニの、小さいものは動物園
のエサとなります。
さてこの茨戸川、実は石狩川に
できた三日月湖。かつてはこ



ガマの密生する水辺

ができて風を防ぐ役目
をしていたから、魚のエサに
なる虫がたくさんいました。水面
に落ちるその虫を食べるに魚も集ま
ってきたの
です」(岡
さん)。今
のように護
岸もされて
いなかっ
たので漁は地
引網で、舟
は櫓こぎ。夏になるとホテルの乱
舞も見られたそうです。
岡さんの会社があるのは石狩市
と札幌市北区が接する交通の要所
会社を起こしたところに賑わったレ
ジャー施設、茨戸ハワイランドを
覚えてる人もいます。と
うの昔にゴ
ルフ練習場
になつてい
ますし、周
辺には大団
地、川向こ
うにはホテ
ル。それで
も生きがいは生れ育った川で漁を
続けることにあり——。



川向かいには大型ホテル

今年七月、新聞報道で驚かされたのはワカサギの定置網にかかった体長百十二センチ、重さ二十二キロのアオウオ。その巨大魚を見つめる岡さんの顔に「これだから漁はやめられない」と書いてありました。



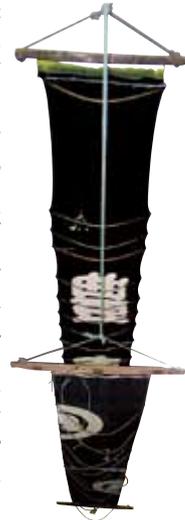
茨戸川下流域

来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦他薦を
お待ちしております。

以前は路地や庭先でよく見られたのに、
近ごろではほとんど見かけることなく
なった光景の一つ、洗い張り
(ひよつと)したらこの言葉さえ
知らない年代も。古くなった
和服をほどこして洗い、糊付け
して板張りや伸子張りにして
布地を再生させていました。その張り板
や伸子(両端に針の付いた竹ひし)がどこ
のお宅にもあったものです。



してこちらの記述があります。明治二十
一年の開業以来、商家ののれんやまん幕

正月や中元に配る手ぬぐい、前掛け、印
ばんでんなどを作ってきました。

今でもその伸子張りが見られるのは染
物屋さんくらい。こちらも数が減ってし
まいましたが、四代当主と若い五代目
ががんばっているのが高野染工場です。

二つの商品を作って四代も続いている
のは札幌でもあまりないのではないで
しょうか」という社長の高野藤彦さん
(六二)。さつぼろ文庫27「職人物語」では、
染物職人の草創期に活躍した店の一つと

要は大きく変わり、注文の八割がのれん
に。それもかつては二人で一日に二十
本を染めた(高野さん)こともあったほ
どだったのに、「息子一人でごなせるほど
の注文しかこない」(同)と笑います。もつ
とも長男の創介さん(六)に言わせると「こ
の仕事は手と目の動きがメイン」なので
若い自分の出番、と頼もしい限り。デザ
インから染めまで一人でこなしています。

5代目創介さんの仕事を見守る高野藤彦社長。大部分をまかせている



高野染工場
札幌市北区新琴似1条8丁目11-14
TEL (011) 762-5580

のれんが出来
るまでを教えて
もらうと、まず
注文を受けてか
ら屋号や入れる
文字などを下絵
師に描いてもら
い、それを基に
した型紙を彫り
ます。その型紙
に従って、染めない部分に糊を置いていき
ます。糊が乾いたら色を塗り、さらに乾



上は大小の伸子。両端に針が付いている。下は洗濯機(右)と乾燥機



染物職人の草分けは 若い五代目も第一線 「天舞龍神」の旗まで

高野藤彦さん——高野染工場(札幌市)



かしてから水洗い
して糊を落とし
ます。最後に縫製し
て出来上がりです。
ここまで「自分
の仕事を誰かが見

ている、どこかで見ている」という職人
気質でやってきたという高野社長。もち
ろんそれが今日、四代、五代と続いてい
る秘密でしょう。しかし、別な原因もあ
るような気がしました。というのも高野
社長、とてもおしゃれというかこぎつば
りした身なりで、外見はちつとも染物職
人に見えないからです。

実は、YOSAKOIソーラン大賞四連
覇、あの新琴似天舞龍神チームの大小の



張り棒や上げ棒は明治時代から使っている

旗はこちらの作品なのです。加えて道内
外その他チームからの注文も受けて大忙し。
中には新琴似チームより
目立つようにと二十四色
の注文を染め分けたとか。
親子でこういう仕事に積
極的に取り組んでいるこ
とも見逃せません。

とはいえ下絵師が高齢
になり、刷毛や伸子を作
る人も次第になくなって
いる昨今、創介さんに
は好きなことをやれと言っている高野社
長ですが、手仕事をなりたいとする人が
困っていく状況を心配しています。中に
入ってみたいくなるような店ののれんは、
高野さん親子のような染物職人の仕事と
いうことを忘れな。

道具で

道草30年

道具収集を続けながら人心の荒廃に心を痛める筆者が
かつて荒れ果てた山荘の掃除に駆けつけたときに
出会った二人の女性登山者とのエピソード

坂一敬

レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品・開発部長）

山小屋の修理と掃除を手伝ってくれないかという連絡が入った。営林署も赤字で、昔作った山小屋も解体・放棄の運命。でも山に登る人間にとっては山小屋があった方がどれだけいいことか。それなら我々で小屋を引き継ごう。かくして週ごとの掃除と維持管理の仕事が当然うまれ、人手が足りないので私のところにも話が来たという訳。

掃除用具一式とシユラフ、キスリングを担いで集合場所まで行った。連れのと合わせると結構な量で、どうやって小屋まで上げるのだろうかと思っていたら、大型のランクルがやって来て、我々と荷物を乗せ、街を抜け、一般の登山道とは別ルート

の山道を駆け上がり、あつという間に山小屋に横付けされてしまった。「知らなかった！こんな道があったなんて」。ラジウスでお茶を飲んで一服した後、受け持ちのトイレに私の読みだと男子の方が汚いだらうからまず先に、ドアを開けると思った通りのキタナさ。何とか仕上げた次の女子トイレは薬勝と思つて開けたら、中の汚れは男子の比ではない。床一面が汚物で汚れ、そここそ足の踏み場もない状態。読みは甘かった。

それでも時間をかけ何とかキレイにした。

どうしてこんなになるんだろう？その日の夜、火を焚いてしばし語り合った。連れがランクルのリーダーを指して、「この人は山に登りたいがため、仕事も辞めバイトで食いつないで、それ以外のほとんどを山で過ごしているすごい人」。今は

山荘に いまも灯るか、 心のあかり。

高層ビルの窓拭きだとか。

リーダー曰く、「今日きれいにしてくれたトイレも一週間で元に戻る。小屋の備品もすぐになくなる。そのうち小屋に鍵が必要になる。鍵のなかった小屋なんて、もはや山小屋とは言えない。モラルが壊れてしまっている。松濤明さんや加藤文太郎さんに言うべき言葉もない……」。

翌日はものすごくよい天気だった。

頂上まで行けるかと思つていたら、彼が言うことには「昼から雨になる。山の天気は変わりやすい」とのこと。果して午後から雨になった。

そこへ、ずぶ濡れの若い二人連れが飛び込んで来た。彼が「今火を焚いてやる。はずかしがらず濡れた服は脱いで火で乾かすといい。このままでと体温を奪われてカゼくらいではす

まない」と言つた。彼女たちはろくに雨具も持っていないようで、不安そうに窓の外を見ていた。

連れが「帰りに、二人を乗つけて行つてやろうよ」と提案したが、リーダーは「我々の出発は彼女たちが出て行つた後にしよう」との返事。私に

も聞かれたので「雨具を持たない山登山の彼女たちをランクルに乗せて特別ルートを下ることを危惧する気持ちは解るけれど、二人を信用してやろう。風邪を引くぞと言つて火を焚いてやつたのだから。沼に悪い影響があると思ひ、クレオソートを塗ることもやめたのだから。若者を信用できなければこの山荘にも明日は来ない」。

降りしきる雨の中、ランクルは一気に山を下った。彼女たちは信じられないという顔で外を見つめていた。街に着くと雨は降っていない。二人は遠慮する我々を半ば強引に喫茶店に誘い、熱いコーヒを注文してくれた。信用されたのがよほど嬉しかったのだろう。

秋も終わりの頃、再び山荘への誘いがあった。男女のトイレはなんとピカピカだった。磨いたのは例の二人。私にどうしても見せて使つて欲しかったのだと言う。夜、パチパチと木のはぜる音をバックにソプラノが流れる。

沈む夕陽の万計の
茜に染まる山荘に
君が語りし若き日の
去りて帰らぬ思い出を

かえでミズナラおい茂り
シマフクロウの森に飛ぶ
川を上れる鮭の群
樹々に踊れる蝶の舞い

守れ自然の山や川
姿かたちは異なれど
ここにも生きる命あり

生きる命は皆同じ

北の風吹く万計の
水面に映る森の影
岸辺に一人佇めば
昔を偲ぶ二輪草

月の光に照らされて
光る水辺に目をやれば
静かに立てる白樺の
梢を鳴らす風の音

今宵空沼わたる風
明日はいつこの峰を吹く



筆者が清掃に行っていたころの空沼岳・万計山荘
現在も有志による管理が続けられている

※ともに著名な登山家。松濤明は遭難死後に出版された『風雪のピバーク』が有名。加藤文太郎は新田次郎著『孤高の人』のモデル

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

アスリートたちは、 いま……。

人気ない放課後の校庭に立つと、目の前に子供たちの歓声が渦巻いているような錯覚にとらわれることがあります。競技場でもそれは同様で、オフシーズンでもアスリートたちの躍動や観衆の応援が聞こえてくるようです。ここ大倉山ジャンプ競技場はウインタースポーツのメッカ。今年二月、

ノルディック世界選手権で日本ジャンプが団体三位に入った場所です。あれから春が過ぎ、サマージャンプでつかの間の賑わいを見せ、いまシーズンインを待っているところ。選手たちがどんなにたくましくなっているか、時計も静かに時を刻んでいます。



Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

を取っていました。また僧職のかたわら、保護司や人権委員、教育委員などの要職にあり、昨年、藍綬褒章を受賞しています。

こうした人生経験の中から生れた句から372句を集めたのが句集「心」です。

永平寺の夜坐深まりり仏法僧
磯遊び子等を見守る教師笛
などに修行時代や教師のころの思い出が。そして

飛魚や眼底にある蒼き海
蒼き海茶髪少年昆布干す
には海辺の町が詠われています。

吾か心曲げぬ強情水澄めり
禪寺に生きて悔なし枯木星

は、なお僧職にかける老いの心の表れでしょう。1ページに2句というぜいたくな編集だけに、それぞれの句の重みが伝わってきます。

本
つくってみませんか
句集・歌集・詩集・小説・随筆集…
自伝・体験記・回想記…画集・写真集



葦牙叢書第九十集
句集「心」
大津良法

A5判・322ページ

著者の大津良法氏は73歳。道南福島町の曹洞宗古刹、最乗山諦玄寺の住職です。永平寺で修業の後、父の後を継ぐまでは地元の中学校で教べ

居間で本づくりセミナーを

自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ

企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十年と歴史を重ねていく度にその歩

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています

慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。